

フランス語版ちりめん本と収納ケース

この箱（写真）、何だと思いませんか？ 実はちりめん（縮緬）本が入られていた収納ケースなのです。

今から9年前の平成十八（2006）年、本学図書館は学校法人京都外国語大学の創立60周年を記念した稀覯書展示会「文明開化期のちりめん本と浮世絵」の開催を翌年の5月に控えて、図録編纂の準備に追われていました。

この展示会では、長谷川武次郎の作ったちりめん本の「日本昔噺シリーズ」の英語を中心に、これを原典として重訳されたヨーロッパ各国の言語版を出展する予定でしたが、その中でも重要なフランス語版のシリーズに欠本があつて不揃いであることに気づきました。

急遽、国内の古書店でフランス語版を調べましたが何処にもなく、外国の古書店で探すことにしました。結局、これを手伝っていただいた日本有数の国際的古書店の方がフランス国内の市場にあることを察知し、素早く購入許可を得て発注できたことを覚えています。

ところが、この書物が到着して驚きました。古めいてはいましたが、ワインレッドが美しい豪華なケースに入っているではありませんか。ちりめん本は注文しましたが、このような入れ物までは頼んだつもりはなく、一瞬、「予算オーバーか」と困惑していました。取り寄せていただいた古書店の方から「付属品」と聞かされて、胸をなで下ろしていたことを思い出します。

ちりめん本「日本昔噺シリーズ」のフランス語版の刊行は、明治十八（1885）年頃から始まり、再版も含めて大正二（1913）年頃まで続いています。おそらく、届いたフランス語版はこの時期に日本に滞在したフランス人が母国に戻

る際に持ち帰ったものではないでしょうか。

その時、このケースはあったのでしょうか。元々、ちりめん本を収納する目的で作られたものかどうかは分かりませんが、添付されていたフランスの古書店の説明書きには、桜の木と竹を材料にしていると書かれていました。この材料は、わが国の工芸品によく使われるもので、竹は網代状に編まれているのです。これだけを見れば日本で作られたものということになりますが、蓋のフック状の鉤は日本製とは思えません。また、その蓋の金属部分の模様や細工も和風とは思えず、素人では判断を下すことはできませんでした。



収納ケース
幅27cm×奥行16cm×高さ（最上部）23cm

いずれにしても、これほど見事なケースに入れられたちりめん本は、持ち主が母国へ持ち帰ってからも大切な宝物であったはずで、それが、フランス語版の最終刊行年から90年以上の時を経て、故郷の日本に戻ってきたのです。初めて書庫に入れる時、「お帰りなさい。ここが永住の館ですよ」と心の中で声をかけずにはおれなかったのです。

（椀）